

臨床心理学的視点を理解するために 視覚的媒体を用いること (その2)

恒吉 徹三

On Using Visual Materials to Understand the View Point of Clinical Psychology
(Part 2)

TSUNEYOSHI Tetsuzo
(Received December 17, 2003)

キーワード：視覚的媒体、提示のスタイル、講義の構造、対象関係論

I はじめに

本稿では、臨床心理学を理解するために視覚的媒体を講義で用いることの有用性や留意点について検討する。特にここでは、①対象喪失、②偏見のメカニズム、③モラトリアムについて学ぶための素材を取り上げて論じる。臨床心理学の視点や概念を学ぶ素材のいくつかについてはすでにのべているので(恒吉, 2002)、講義内容を規定している講義の構造という観点からも検討を加えることを目的とする。

II 視覚素材

1. 対象喪失の理解

1) フロイトの「喪の仕事」の概念について

喪の仕事とは、何らかの対象を失った後に、心の中に失ったものを失ったものとしておさめていく作業のことである。喪は、愛した人や、国や、自由、理想などを失ったことへの反応であり、愛する対象が存在しないことを現実検討しながら、対象に向けていたりビドーを取り下げるという役割を果たしている(Freud, 1917)。これには、逆に多くのエネルギーと時間とが投入され、残されたものの内的な世界に息づいている対象にまつわる数々の記憶や期待との結びつきが次第に解かれ、この過程が進行するなかで対象は心の中に存在し続けることになることも指摘されている。つまり、喪の仕事の困難さは、外的には不在の対象が、内的には在しつづけていることによるものであることがひろく指摘されている。

このような、喪の仕事やその過程について理解を深めるための身近な素材にはさまざまなものがあると考えられる。たとえば、大事マンブラザースの歌う『それが大事』の歌詞に「そこにあなただがないのが淋しいのじゃなくて、そこにあなただがないと思うことが淋しい」とあり、外的な世界に対象が不在であることより、対象が不在であることに思い至ることのほうが苦痛を引き起こしやすいことが日常的なところでも示されている。さらに、この概念を研究した晩年のFreud自身の立ち居振る舞いの様子についても、現在では映像でとらえることができることで、よりいっそう刺激的でもある。

本稿では、対象喪失のなかでも死別をテーマとした2つの映画を取り上げて、喪の仕事の理解に貢献する素材として検討したい。

2) 喪の仕事について理解する視覚媒体

(1) 「シックス・センス The sixth sense」(M・ナイト・シャマラン監督, 1999年)

この物語は、死にきれずにさまよっている死者が見える少年コール・シアー(役: Haley Joel Osment)と、その心理療法を担当するマルコム・クロウ(役: Bruce Willis)との関係を中心に描かれている。その一方では、マルコムと妻であるアンナ(役: Olivia Williams)の関係、コールと母親であるリン(役: Toni Collette)との関係が並行して描かれており、ここに映画としての重要な『秘密』が隠されている。この秘密について論じると、本稿のテーマはより明らかとなるが、映画としての「オチ」の部分でもあるので敢えて取り上げないことにする。しかしながら、この秘密は重要な側面であり、北山(2001)が指摘しているような「急激な幻滅」が避けがたく存在していることを示している秘密でもある。それゆえに秘密なのであり、すぐには向き合えない重さを持っている。

映画のあらすじは次のようなものである。他者には見えないものがみえる少年コールは、自宅でもベッドの周囲を布でまるでテントのように覆っており、おびえながら毎日を送っている。そして、コールはマルコムのことも初めは信用しかねていたが、次第に信頼していくことになる。この関係の変化は、学校のクラスの中でも浮いていたコールが、クラスメートに受け入れられている過程と並行して描かれている。死者は、死に切れずにさまよい出てきて、コールに思い残したことを訴えているのだが、コールは恐れるあまりに、死者から逃れることに精一杯であった。しかし、マルコムが、死者は何かを訴えるためにコールの前に出てくるのだから、死者の訴えを聞くようにと助言する。コールが、死者の話聞きはじめると、死者への恐れはうすれていく。そして、コールは死者から生き残った人に言い残した思いを伝えるための使者としての役割を果たすことになる。

この映画を、多くの人には見えない「霊」が見える少年の「幻覚」についての物語だとしてかたづけると、素材としての意味を失うことになる。一見すると、死者の側から死に切れない思いだけを描いているようであり、その反対側にある、残された者の死者への収まりようのない思いの強さを描いているものとしてとらえることができるであろう。つまり、対象関係論の視点からみると、対象としての死者は、生きている人物の自己と対をなしており、死者の残した思いと生き残った者の後悔の念とが、死者という対象と生き残った自己との対話として映画には描かれていると考えることができるであろう。あたかも外的な世界に存在し、死に切れずにこの世をさまよっている対象として描かれている「霊」が、実は残されたものの内的世界に今なお存在しつづける対象(内的対象)を視覚的に描き出しているものとして理解することで、内的な世界で起きている愛する対象を喪失した事実を受け入れることの困難さを、映像を通してより視覚的にとらえることを可能にしてくれる素材として用いることができるようになる。

また、ここでは「霊」が見える少年として描かれているが、子どもの内的世界でのファンタジー(phantasy)としてとれるなら、より一層多くの人にも理解しうるものとなるであろう。たとえば、幼児期ないし児童期には、「想像上の仲間(imaginary companion)」を保持している子どもはまれではない。ここでいう想像上の仲間とは、まるで外的な世界にも存在しているかのように実在感の強い想像上の対象であり、人形のな

い人形遊びをしているようなものである。誰もいない椅子にあたかも対象が存在しているかのごとくに話しかけたり、遊んだりするのである。国内での心理学的研究は少なくテキストや辞典でもあまりとりあげられていないが、大学生を対象とした調査からは、幼児期から児童期にかけて多くは出現し消えていくが、大学生においても保持されている場合のあることや(川北, 1995: 犬塚ら, 1991: 麻生, 1996)、幼児期の子どもをもつ母親を対象とした調査では、実際にも観察されていること(川北, 1997)などの報告がある。これらの研究では、出現率は9.8~17.2%であり、まれな現象ではないことが示されている。

対象喪失についてばかりではなく、想像上の仲間といった子どものファンタジーの領域までも広げてとらえることのできる素材としての意義は大きいと考えられる。

(2) 「黄泉がえり」(塩田明彦監督, 2002年)

この映画は、『シックス・センス』以上に残されたものの心的世界に重点を置いて描かれているため、残されたものと故人との対象関係をより鮮明に理解できる。話の内容を以下に要約する。熊本県の阿蘇を舞台としたこの映画では、特定の地域内で死者が蘇ってくる。厚生労働省の調査官に扮する草彅剛(SMAP)が、故郷熊本に現地調査のために訪れ、幼馴染で地元の役場の職員に扮する竹内結子と協力し、蘇えてきた人々に医学的な検査やインタビューを行う。すでに死者のいない生活に適應していた人々の間には混乱が生じる。息子は「神隠し」にあったものとして生活をしてきた年若い母親のもとに、行方不明となった当時の年齢のまま子どもがよみがえる。ラーメン屋を経営している女性店主のもとには、死んだ夫がよみがえってくる。店ではすでに新たに店員を雇っており、この男性店員と息子の間には親子のように親しい関係が出来上がっていて、女性店主も店員のことを心憎からず思っている。このように、すでに新しい対象との関係が形成されているさなかに蘇ってくるのである。しかし、蘇えてきた人々は、3週間後に「黄泉」の世界へと帰っていく。このタイトルには、死者がこの世に蘇ってくるという「蘇えり」という意味と、ふたたび黄泉の国へとか帰っていくという「黄泉がえり」という意味とがかけことばになっており、言葉の「音」を媒介としてつながっていると解釈できるかもしれない。つまり、死者と残されたものとの対象関係がより強調されていると考えることができるであろう。また、死者でありながら死という事実気づくことなく生活している人物も描かれており、その対極にある死者の死を受け入れられていない残されたものが対をなして描かれている。ここにも、いかに対象の喪失を受け入れることが、双方からみて困難なものであるかが示されている。

映画では、生き残ったものの死者への強い思いが、死者をよみがえらせるという設定となっている。ある学生は、「残された人の思いは、死者を蘇らせるほどに強い」とこの映画の感想を述べた。喪の仕事には、多くの時間とエネルギーが必要であることは、すでにFreud (1917) が述べているところであるが、この仕事の困難さをよく示している素材である。一方、小此木(1979)は、喪の仕事は「断念を可能とする心の営み」であり、悲しむことのできる能力の重要性を指摘している。つまり、今となっては取り返しのつかない対象としてあきらめながらも、対象が不在であることにまつわる悲しみは感じ取ることができることの両面が重要なのである。

この映画を講義の素材として用いることで、重要な対象を失うことの大きさと悲しみの強さ、対象喪失後の喪の仕事の困難さ、悲しむことの重要性についての理解を深めること

ができるであろう。

2. 偏見について理解する：「リロ・アンド・スティッチ」(ディズニー)

ここでは、ディズニーの「リロ・アンド・スティッチ」を素材として用いる。この映画は、「違法の遺伝子実験」により人工的に作り出された6本足の生物「スティッチ」が、「ゆがんだ精神をもった魔物」として追放されそうになり、地球へと逃亡するところから始まる。スティッチは、ペットショップに引き取られて、犬を買いにきた姉と二人で暮らしている少女「リロ」の飼い「犬」となる。リロの友だちから、「ブサイクな犬」「病気がうつりそう」だと言われて嫌われる。スティッチは、破壊プログラムを埋め込まれているために、触ったものを壊していく。しかし、リロはスティッチを嫌いになることはあっても恐れることなく関わり続け、スティッチもリロの期待に応えようと、ときにはトラブルを引き起こしながらも次第に破壊性を抑えようと試みながら生活する。あるとき、スティッチが逃げ出した星から捕獲のための部隊がやってくるが、リロの保護下におくという条件で、地球で暮らしていくことが許可される。しかし、スティッチは最後まで6本足のモンスターのままで人間になることも、本当の犬になることもない。

ここでスティッチを、リロの心の中にある取り扱いがたい情緒を置き換えたものだととらえることにする。リロは、スティッチと喧嘩別れをし、そしてまた新たなつながりを持つというように、ぶつかり合いながらお互いを確かめ合っていく。この過程は、外的な対象へと投影されがちな不快な情緒体験を、吐き出したり、再び取り込んだりしながらやがては自らのものとして見つめていく過程として理解することが可能であろう。投影とは、内的ものを分裂させ、外的世界へと排除し、他者のものとしてとらえるメカニズムのことであるが、はじめは、モンスターとして描かれながらも仲良くつきあう自我親和的な対象であったものが、次第に自我異和的となって意識化されるうちに、排除されることなく自らのものとして引き受けられていくという、投影されたものが引き戻される過程が描かれているととらえることができる。

つまり、偏見とは、個人の内的な世界にある受け入れがたい情緒によるものであり、この情緒を外的な世界や対象の属性として排除することにより生じているものとして、つまり投影というメカニズムという側面から理解することができるであろう。北山(1993)は、「見るなの禁止」について述べるなかで、「醜い」という言葉は、「見るのが難しい(見にくい)」という見る側の問題としてとらえてのべている。つまり、偏見の生じる背後には、対象を見る側の問題があることを理解する必要がある。それゆえ、この受け入れがたい情緒を自らのものとして理解し、分裂排除することなく抱えることが必要となろうが、偏見の問題は、微妙で、繊細な面があるため、議論するにもタブーがついてまわる。そこで、このようなビデオ素材を用いることで、見る側をはじめとする主体の問題として偏見を捉え、議論するための題材を提供することになりえると筆者は考えている。しかし、ある受講学生は、素材を提示する前に、素材をどのような視点からとらえるとよいかを伝えることは、「これこそが偏見」だと指摘した。つまり、伝達者の側の枠組みを素材の提示に先立って伝えることが、逆に受け手である学生の視野を狭める結果を生んだのであった。しかし、このような、素材の提供方法そのものについても学生が意見を述べる機会が確保されていることの意味は、語りあうことさえも時に困難な話題に、偏見の内容よりも形式面からの接近を可能にすることである。

3. モラトリアムについて学ぶ：「ピーター・パン」(ディズニー)

モラトリアムとは、経済学用語を心理学用語として転用したもので、社会が提供している「子ども時代とおとな時代の媒介期間 intermediatry periods つまり『制度化された心理—社会的猶予期間』 psychosocial moratoria」を指し、Freud (1905) の精神-性的発達論の潜伏につぐ「第二の延期期間」として位置づけられている (Erickson, 1959)。つまり、大人として社会の中に自らの位置づけを見出すまでの、中間的で移行的な段階としてとらえられている。しかし、この段階が移行的なものとしてではなく、ひとつのアイデンティティ状態として位置づけをもった存在である「モラトリアム人間」についても論じられている (小此木、1978)。『新しいモラトリアム心理』を保持して生きている無帰属で無党派のお客様の存在としてとらえられている。ここでモラトリアム人間といわれているのは、青年期の心性だけをさすのではなく、日本の多くの人びとの深層にある特性であるとされている。お客様意識のままにモラトリアム人間が存在できるのは、当事者意識の強い人々や社会が背景で支えていることによるものであることも合わせて指摘されている。このモラトリアムという言葉の用い方について、エリクソンでは時期を示す時間概念であったが、小此木では一種のアイデンティティ拡散状態を示す用語となり、一般化して用いられているものである (鑑, 2002)。

筆者は、モラトリアムを理解するための素材として、『ピーター・パン』を取り上げる。ピーター・パンは、100年ほど前にイギリスで戯曲として演じられていたのであるが、ここではディズニーのものをを用いる。この物語は、ある夫婦がパーティに出かける場面から始まる。あわただしく身支度をしている両親を横目に、子どもたちは、ピーター・パンごっこをしてはしゃいでいる。これにいらだった父親のジョージは、ピーター・パンの存在を弟たちに姉のウェンディが吹き込んだことが原因だと腹を立てて、ウェンディに今日から1人で眠るようにと吐き捨てるように言う。この夜、ピーター・パンと妖精のティンカー・ベルにいざなわれて、ウェンディと弟たちはネバーランドに出かけるのである。ネバーランドでは、ウェンディに嫉妬したティンカー・ベルの裏切りによって、ウェンディと弟たちはフック船長とその手下の海賊たちに捕まる。危うくウェンディがワニのえさになるところでピーター・パンに助け出され、ネバーランドからふたたび家へと空飛ぶ帆船に乗って帰ってくる。最後の場面では、ピーター・パンの存在を否定していた父親も、かつて自分もこの船を見たことがあることを想起するというくだりになっている。

つまり、ウェンディの「第2の個体化過程」(Blos, 1967) のさなかにピーター・パンは出現するのであり、子ども部屋から出されること、いわば子ども扱いされなくなる瞬間に登場するのである。大人にはなりたくない、まだ子どもでいたい、というモラトリアムの空間を確保する世界がネバーランドであり、ピーター・パンはしばらくの間子どもでいられる世界への移行を橋渡しする存在として理解することができよう。ピーター・パン自身が、ふわふわと宙に浮いた存在として描かれており、地に足がついていない存在であることから、いまだどこにも身の置き場を確定していないモラトリアムを理解する素材としてふさわしい素材だと考えられよう。さらに、この物語は西欧のものであることから、夫婦がパーティという大人の世界の出来事に連れ立って出かけるという男女としての両親が描かれており、青年期におけるエディプス・コンプレックスの再燃について合わせてとらえることができる素材となる。本稿の主題に沿ってとらえると、男女としての両親像と向き合うまでの移行期間が描かれているものとしてとらえることができるであろう。しかし、

ピーター・パンは西欧の物語であり、これを普遍的なものとして日本で青年のモラトリアムを語る素材として用いる場合、相違点も含めた問いかけが必要であろう。つまり、現代日本では、アイデンティティ形成を考えると、社会の期待している大人像つまり成人としての男性像や女性像、ひいては父親像や母親像が明確とはいえない状況にあり、多くの人々がモラトリアム状態におかれていると考えられる。そのため、個人がモラトリアム状態にあることを受け入れるしかないという現状にあることを理解しておくことも必要となる。文化や時代的な背景も含めて検討すると、より幅広く素材を用いることが可能となる。

このように、モラトリアムは、価値観や生きかたの多様化により、成人初期から中年期まで拡大していることが指摘されている（岡本，1993）。つまり、青年期固有のものでさえなくなっている。中年期のモラトリアムは、青年期に形成されたアイデンティティが、中年期の心理的・身体的な変調を契機として始まる「自我同一性再体制化のプロセス」（岡本，1985）の中で生じるものである。これまで築いてきた自己のアイデンティティの再検討と自らの将来への模索のためのモラトリアムであるために、青年期のアイデンティティ形成のプロセスとの類似性が指摘されている（岡本・松下，2002）。このような観点から、ピーター・パンを検討してみると、中年期のモラトリアムを理解するための素材であるより、青年期のモラトリアムの素材として位置づけられるものであろう。

さらに、このモラトリアム状態に在ることの深層には、対象喪失に際して生じる喪の仕事の排除があることも指摘されている（小此木，1979）。つまり、対象との深い関わりや同一化を避けることで、対象を喪失した際に生じる悲しみを回避するものであるとして言及されているのである。ネバーランドという非現実的な世界は、親という児童期までの依存対象の喪失を否認し、躁的に防衛していることを表現しているものとして理解することもできるものと考えられる。

Ⅲ 考 察

1. 視覚的媒体を講義に用いることの功罪について

視覚媒体を臨床心理学の視点を理解するために用いることは、いかにこれを提示するかという点を考慮することが重要な課題となるであろう。それぞれの視覚素材は、言語的な知識の伝達とは異なり内容が多義的であるので、学生によって受け取り方に幅があることが利点であり同時に欠点ともなりうる。この多義性を排除するために先に伝達者の意図を伝えることは、素材をある視点からみるには有益であるが、逆にゆがみも与える結果を生みやすい。そこで、学生が自ら思考し想像する幅を広げる必要があるときには、Winnicott や Casement らの指摘しているように、素材と遊ぶことのできるゆとりを残して提示する工夫が求められると考えられる。ここで筆者の想定している講義は、単に知識だけを獲得するだけではなく、より心理学的な発想を理解し日常的な世界を心理学的な視点でとらえることを目標としている場合である。

素材自体が訴えているメッセージがすでにあり、これと講義の素材として提示しようとする伝達者の意図が加わることから、2つの視点がすでに準備された中で学生は素材を見ることになる。加えて、学生自身の読み取り、受け取り方もあるので、複数の視点が錯綜することになるとしても、この幅を確保することは最低限のこととして必要であろう。視覚的媒体を講義に用いることは、直接取り出して目に見えない心を対象としている学問にとって、学生の理解を促す機会となりうる。しかしながら、その一方で、あらかじめこち

らの想定した意図を押し付けるという側面のあることは、すでに指摘したとおりである(恒吉、2002)。そこで、本稿では、いかに素材を学生に差し出すのかという提示の仕方についても次に検討する。

2. 視覚素材の提示について

臨床場面において、面接者が理解したこと、たとえば解釈をどのようにクライアントに伝えるかについて、面接者からクライアントに対して一方的に「与えられた given」ものではなく、「差し出された offered」ものであることがより望ましい方法であることが指摘されている (Casement, 2002)。つまり、伝達者は相手が求めているものを押し付けることなく幅をもって伝えることが重要であると考えられる。この点についてさらに詳しく指摘している Winnicott (1941) は、「ためらいの時期 (period of hesitation)」として取り上げており、提示した素材を受け手は、どのように扱うかと周囲の反応をうかがいながら意を決するまでためらっている時間の重要性について検討している。このためらいの時期によって、押し付けではなく差し出された対象を自発的に受け取ることが可能になるのである。この知見は、臨床場面から得られたものであるが、情報伝達の方法論として講義への援用も可能であろう。つまり、素材に一定の枠組みを伝達者がつけて受講学生に押し付けるのではなく、受け取り方には幅を残したうえで受け手の求めているものを差し出し、そして提示のタイミングや方法にも工夫が必要とされているのである。ここでひとつ例をあげると、筆者が、「リロ・アンド・スティッチ」の素材を提示する前に、登場人物のスティッチを心の中にある偏見だという視点から見のように伝えて映像を提示した。これに対してある学生が、「あらかじめ視点を限定するという色づけこそが偏見である」と講義への感想を述べる中で指摘した。この意見は、受け手の自由度が低く、押し付けられた一面のあったことを明確に示している。伝達者としては理解しやすくするために、理解の意図や視点を先に示したわけであるが、受け手である学生にとっては押し付けられたものとしてとらえられるという反面のあることを認識しておくことは重要である。

臨床場面で面接者が何を言ったかという内容以上に、その言い方やふだんの臨床作業のスタイルや、解釈の伝え方といった形式的側面も、コミュニケーションとしての機能を果たしていることが指摘されており、より望ましいのはクライアントが面接空間の中でより自由に発想し考える心理的ゆとりを提供するような形式を備えていることだとされている (Casement, 1990)。これは講義において、講義素材をいかに提示するかという提示の仕方という形式的側面から、学生は伝達者の意図や、さらには自らがどのように伝達者から見られ、またとらえられているのかをじかに感じ取っていることを理解する視点ともなりうるであろう。しかしながら、単に知識を提供するという側面だけを考えるなら、正確に伝えることが重要であり、ここで述べているような幅のある受け取り方のできる余地を必要としない場合もあると考えられる。

さらにここで、講義を構造的な観点から検討してみたい。講義は、講義の行われる外的環境である物理的空間、時間的側面、受講学生の人数、およびより内的な側面として成績評価や出欠の取り扱いなどの側面が、講義内容にも影響を与えることを考えると、心理面接場面における「治療構造」(小此木, 1985) の観点からも検討することが可能である。講義内でのコミュニケーションを規定している外的および内的な枠組みの観点から講義という行為を考える視点を、ここでは、『講義構造』としてとらえ、伝達者と受講学生との

関係と理解を深める視点として用いるものである。学生が講義時間において、自ら思考し発想するという心理的なゆとりを伝達者が提供しているかという側面について、提示する素材自体について検討するだけでなく、その素材を提示するという提示方法や講義全体という講義構造という側面からも検討することが必要であると考えられる。

このように、対象関係論および講義の構造という観点から、視覚的媒体の提示やその意味をいかに伝えるかについて考えるとき、視覚的媒体を用いる意図やテーマを提示者が一方的に枠付けして与えるのではなく、いかに学生と提示者とが共有できるかが理解を促す鍵となるであろう。さらに、共有するという点について講義の構造的点から考えると、筆者が実施している講義は対面法であるが、視覚素材を提示する際には学生に対して180度法の位置に伝達者が移動することとなる。心理面接においても日本では多くの場合対面法が用いられているのだが、フロイトは精神分析を寝椅子による背面法で行った。さらに、子どもの発達を考えるさいに同一対象を母子が横並びの位置で見るという共同注視が注目され (Moore&Dunham, 1995)、浮世絵における母子関係研究においても同一の対象を母子が横ならびになってながめているという“viewing together”という日本の母子関係のあり方や、小津安二郎の作品におけるベンチに二人が横ならびに座って会話する場面など、日本においても横並びになりある対象が共有されながら会話がすすむことがごく日常的なものであることが指摘されている (北山, 2001)。つまり、横並びになることで視覚的素材を伝達者と受講者とが共有することを通して、ある理解へと至ろうとすることになる。空間的に横並びであることが、伝達者と受講者との関係を象徴する可能性があるため、提示内容についての学生自身のとらえ方を自由に述べる、または考えるだけの余地を与える工夫にもなりうると考えられる。教える関係では、知っているものが知らないものへ、つまり上から下へという方向性が潜在的に含まれやすいと考えられるが、この横並びの関係にはより水平方向への関係の移動を含むことになるであろう。

IV さいごに

本稿では、臨床心理学の理解を深める素材として視覚的媒体を提示し、素材の示している心理学的意味についてまず検討した。つぎに、素材の提示の仕方とその学生への影響について検討した。具体的には、講義という物理的・心理的な構造が、視覚素材の内容そのもの以上に、学生とのコミュニケーションスタイルを規定している可能性について臨床心理学の視点から検討した。このように、講義内容だけではなく講義の形式的側面である構造の点からも検討することで、伝達者と学生という相互の関係は、講義の構造により規定されている側面があることが理解されやすい。たとえ同じ内容であっても構造的側面から内容が影響され受け取り方を規定することになりうるため、より幅のある受け取り方や発想をひろげることのできる心的な空間を学生に残すような提示方法の必要性について述べた。しかしながら、この観点をさらに臨床的に検討することは、その方法論からみても今後の課題である。

[付記]

平成15年9月21日、精神分析家であり心理臨床へも多大な貢献をされた小此木啓吾先生がご逝去されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

本研究の素材として用いた「シックス・センス」「リロ・アンド・スティッチ」「ピーター・

パン」のDVDは、山口大学教育学部「多人数支援経費」により購入したものです。また、Freud自身の立ち居振る舞いについて理解する意味で講義で用いた「偉人列伝－20世紀の巨人・生命と科学」(XXle Siecle – Vision 7 – La Cinquieme – T.O.P., 1996, アイ・ヴィー・シー株式会社, 2003)も同経費により購入したものです。

文献

麻生武 (1996) : ファンタジーと現実. 金子書房.

Blos, P. (1967) : The Second Individuation Process of Adolescence. *The Psychoanalytic Study of the Child*, **22**, 162-186.

Casement, P. (1990) : *Further Learning from the Patient : The Analytic Space and Process*. London : Routledge

Casement, P. (2002) : *Learning from Our Mistakes : Beyond Dogma in Psychoanalysis and Psychotherapy*. Hove, East Sussex : Brunner-Routledge.

Disney (2002) : リロ・アンド・スティッチ. ブエナビスタホームエンターテイメント.

Disney (2003) : ピーター・パン. ブエナビスタホームエンターテイメント.

映画「黄泉がえり」製作委員会 (2003) : 黄泉がえり, (2002年, 監督: 塩田明彦, 製作: TBS・電通・東宝・IMJエンターテイメント・毎日新聞社・カルチュア・パブリッシャーズ・WOWOW・日本出版販売・IMAGICA・ツインズジャパン), 発売元: TBS, 販売元: 東宝株式会社

Erikson, E. H. (1959) : *Psychological issues : Identity and the Life Cycle*. International Universities Press. 小此木啓吾訳編 (1973) : 自我同一性: アイデンティティとライフサイクル, 誠信書房.

Freud, S. (1905) : Three Essays on the Theory of Sexuality. *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, Vol. 7, London : Hogarth Press, 123-243.

Freud, S. (1917) : Mourning and Melancholia. *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, Vol.24, London : Hogarth Press, 237-258.

犬塚峰子・佐藤至子・和田香誉 (1991) : 想像上の仲間に関する調査研究. 児童青年精神医学とその近接領域, **32**(1), 32-48.

川北美輝子 (1995) 「想像上の仲間」に関する研究. 未公刊 (九州大学教育学部卒業論文).

川北美輝子 (1997) : 「想像上の仲間」に関する研究(2). 未公刊 (九州大学大学院教育学研究科修士論文).

北山修 (1993) : 日本語臨床の深層第1巻: 見るなの禁止. 岩崎学術出版社.

北山修 (2001) : 幻滅論, みすず書房.

Moore, C.&Dunham, P. J. (1995) : *Joint Attention : Its Origins and Role in Development*. Lawrence Erlbaum Associates, 大神英裕監訳 (1999) : ジョイント・アテンションー心の起源とその発達を探る. ナカニシヤ出版.

岡本祐子 (1985) : 中年期の自我同一性に関する研究. 教育心理学研究, **33**, 295-306.

岡本祐子 (1993) : アイデンティティ論からみた中年期の危機と発達. 発達, **54**, 29-36.

岡本祐子・松下美知子編 (2002) : 新・女性のためのライフサイクル心理学. 福村出版.

- 小此木啓吾 (1979) : 対象喪失—悲しむということ. 中公文庫.
- 小此木啓吾 (1985) : 治療関係論. 小此木啓吾編, 新・医療心理学読本. 日本評論社, 30-40.
- ポニーキャニオン株式会社 (2000) : シックス・センス The sixth sense (1999年, アメリカ : M・ナイト・シャマラン監督), 配給 : 東宝東和.
- 恒吉徹三 (2002) : 臨床心理学的視点を理解するために視覚的媒体を用いること. 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第14号, 189-195.
- Winicott, D. W. (1941) : *Collected Papers : Through Paediatrics to Psycho-Analysis*. Tavistock Publications : London, 1958 : 深津千賀子訳 (1989) : 設定状況における幼児の観察. 北山修監訳 : 小児医学から児童分析へ. 岩崎学術出版社.